

歌の力を考える

— 讃美歌412番「わがやまとの」の場合 —

津 上 智 実

The Power of Song: A Case Study of Church Hymn No. 412 'Waga Yamato no'

TSUGAMI Motomi

要 旨

讃美歌412番「わがやまとの」は、1947年6月12日、昭和天皇の神戸女学院来院時に生徒たちが自然発生的に唱和したと伝えられるが、現行の讃美歌集には掲載されず、今の教会では歌われない。この歌は一体いつから、いつまで讃美歌集に掲載され、どれほど広く歌われていたのか。讃美歌集の横断調査によって、この疑問に答えるのが本論の目的である。

調査の対象は、柳澤健太郎編「国立国会図書館所蔵讃美歌目録（和書編）」『参考書誌研究』第71号（2009年11月）掲載303点の内、1947年以前に出版された106点と、手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成』（大空社、1996～1997）全42巻で、それに神戸女学院大学図書館所蔵分を加えた。

調査の結果、これらに収録された「わがやまとの」とその関連讃美歌46点を得て、「(表1) 讃美歌『わがやまとの』とその関連讃美歌一覧」として整理した。

この讃美歌の原詩は‘Our native Land’ (John S. Dwight, 1844)、先行の邦訳に永井えいこ訳「ひのもとなる」(1884)がある。松山高吉訳の歌詞「わがやまとの」の初出は『新撰讃美歌』(1888)、ジョージ・オルチン George Allchin 編曲（原曲は G. M. ギャレットと伝えられる）の旋律「Hinomoto」の初出は『新撰讃美歌』譜附改訂版（1890）で、約2年半のずれがあり、当初「わがやまとの」の歌詞は「ひのもとなる」の旋律（America）で歌われていたとの植村正久の証言がある。

その後、歌詞「わがやまとの（原）」は1902年に松山自身によって改変されて「わがやまとの（改）」となり、オルチンの旋律と共に1910年以降の讃美歌集で宗派を越えて広く用いられた。この詞と曲は戦後の讃美歌集でも引き継がれ、1997年の『讃美歌21』で収録曲から外された。

以上から、讃美歌412番「わがやまとの」の歌詞「わがやまとの（改）」は1902年から用いられ、同じく旋律（Hinomoto）は1890年の初出後、1910年以降は旧旋律（America）に取って代わる形で広く用いられて、キリスト教関係者に定着していたことが明らかになった。

キーワード：讃美歌、松山高吉、ジョージ・オルチン、わがやまとの、天皇行幸

Summary

This paper aims to trace the history of church hymn no. 412 ‘Waga Yamato no’, which was sung by Kobe College students for the Imperial visit to the College on June 12th 1947. For this purpose, a survey of the church hymnals published in Japan from the Meiji Era up to 1947 has been made.

I have examined 1) the hundred and six hymnals from this period out of those hymnals listed in YANAGISAWA Kentaro’s ‘Catalogue of Church Hymnals of the National Diet Library’ (2009), 2) forty-two volumes contained in the *Collection of Meiji Era’s Church Hymnals* edited by TESHIOGI Syunnichi (1996-7), and 3) those in the possession of the Kobe College Library.

This has resulted in a table containing forty-six occurrences of the church hymn ‘Waga Yamato no’ and those related to it, accompanied by variants in the text and the music.

The standard Japanese text of this hymn, provided by MATSUYAMA Takayoshi (1846-1935) from ‘Our native Land’ (John S. Dwight, 1844), first appeared in *Shinsen Sambika* of 1888, while there is an earlier Japanese version by NAGAI Eiko as ‘Hinomotonaru’ (1884). George Allchin (1851-1935) arranged a tune by G. M. Garret to the text ‘Waga Yamato no’ with the title ‘Hinomoto’, and first published it in *Shinsen Sambika* of 1890. In between the text was sung with the melody of ‘Hinomotonaru’, i.e. ‘America’, according to witness UEMURA Masahisa (1858-1925).

In 1902, Matsuyama revised the text and this revised version was widely used with the melody ‘Hinomoto’ in church hymnals of diverse denominations and purposes especially after 1910. This hymn was inherited also after the Second World War but removed in 1997 from *Sambika* 21.

Of the church hymn no. 412 ‘Waga Yamato no’, it was made clear that the text, that is the revised one, was sung from 1902 and the melody, ‘Hinomoto’, was first published in 1890 and sung widely after 1910, replacing the previous one, ‘America’.

Keywords: Church hymn, MATSUYAMA Takayoshi, George Allchin, Waga Yamato no, imperial visit

1) 不思議な歌

わがやまとのくにをまもり、あらぶるかぜをしづめ、
よよやすけく、をさめたまへ、わがかみ

讃美歌412番「わがやまとの」は、昭和22（1947）年6月12日、昭和天皇の神戸女学院来院時に、生徒たちが自然発生的に唱和したと伝えられる歌である。事前の指示や打合せがあった訳でもなく、誰からともなく歌い出したと複数の関係者から聞いた。とすれば、実際、そうであったと認める他ない。

だが、これは不思議な話である。多数の人間が自然発生的に一つの歌を歌うというのは、よほど特殊な場で、特殊な歌についてしか起こらない。その条件として、1) 皆で歌える歌があったこと、2) この歌を歌える（共有している）人々が集まっていたこと、3) この歌を誰もが歌いたくなる文脈がその場に出現したこと、これら3つが揃って初めて大人数での自然発生的な唱和が成立しうる。よく知られた例としては、タイタニック号沈没時に聞かれたと伝えられる讃美歌「主よ、御許に近づかん Nearer, My God, to Thee」が挙げられるだろう。

讃美歌412番「わがやまとの」は、現行の讃美歌集『讃美歌21』には掲載されておらず、今の教会では歌われない歌である。この歌は一体いつから、いつまで讃美歌集に掲載されていたのだろうか。どれくらい広く歌われていたのだろうか。1947年以前に出版された讃美歌集の調査によって、これらの疑問に答えるのが本論の目的である。

2) 天皇来院時の唱和

敗戦から2年足らずの昭和22（1947）年6月12日、関西巡幸の途次、昭和天皇が神戸女学院に来院し、院長室で昼食の後、中庭に面した総務館玄関の階段に姿を現した¹⁾。その時、「七百余の生徒の口から讃美歌四百十二番“わがやまとの国を守り”が湧くように流れて来た」と『毎日新聞』（大阪版、1947年6月13日）は伝え、同日付の『朝日新聞』（大阪版）は「陛下は…四百名の女学生の前で讃美歌の合唱四百十二番『祖国』をきかれた」と報じている。1999年に発行された『私たちの学生時代、神戸女学院ものがたり』でも、「私たちは一斉に、讃美歌四一五番²⁾を歌い始めた。専門学校生と数百人の大合唱であった」（208頁）³⁾と回顧されている。

本学の卒業生の中に、その時のことを語ってくれる人もいる。2012年10月26日にめぐみ会神奈川支部会で講演「神戸女学院とピアニスト小倉末子—明治期開港地の音楽教育をめぐって」を行なった際、出席者中の最長老であった益田葉子さん（KH65）から、天皇の神戸女学院来院時に讃美歌「わがやまとのくにをまもり」を歌ったという話を伺った。筆者が「事前に学校

1) この時の写真が『神戸女学院百年史（総説）』（1976）の277頁にある。

2) 讃美歌412番「わがやまとの」は、1949年の『讃美歌』（改訂版）以降、415番となった。

3) 高木和子（65回）「動乱の中の学生時代」『私たちの学生時代、神戸女学院ものがたり』（「私たちの学生時代」を発行する会、1999）204-210頁。

側から指示があったり、練習したりしたのですか？」と尋ねたところ、「いいえ、そんなことは何にもなかったと思いますよ。誰からともなく歌い出して、先生たちはむしろ驚いたような顔をしていらっしゃいました」との答えであった。生徒たちが自発的に、自然に歌い出したというのである。

同窓会であるめぐみ会会長の橋本恵里子さんからも「母〔岩橋明子氏、E66回生〕は、事前の練習等はなかったと言っております。自然にどこからともなく…歌いだされ、合唱になったということです」とのお返事を頂いた。また、元学長の小玉智子先生（経65回生）の最終講義の中でも、思わず歌ってしまったことを述懐する発言があったと飯謙先生から伺った⁴⁾。

数百人の人間が「自然に」「思わず」歌い出してしまった歌とは、どのような歌だったのだろうか？

3) 讃美歌412番「わがやまとの」

讃美歌412番「わがやまとの」の歌詞を、1943（昭和18）年6月に刊行された『讃美歌、時局版』（小崎道雄編）⁵⁾ から引いてみよう（次頁「歌詞カード」の歌詞D参照）。

タイトルは「祖国」、作詞者は松山高吉、曲譜は「ジョージ・オルチンの編曲による（Arranged by George Allchin）」、聖書は「歴代下、20・6、12」と添え書きされている。これに与えられた楽譜はホ長調、4声体である【譜例8】⁶⁾。

日本基督教団讃美歌委員会『讃美歌略解（前編、歌詞の部）』（1954）によれば、讃美歌415番「わがやまとの」は「国祭日その他の国家の行事に日本の教会で最もよく歌われる歌」「単純平明な愛国の歌で、曲もうたいやすいところから、大いに用いられ、大正13年、皇后陛下が同

譜例8)『讃美歌、時局版』（1943）412番



412 祖国 169
松山高吉 Arranged by George Allchin, 1899

わがやまとのくにをまもり
あらよすけく、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ

わがやまとのくにをまもり
あらよすけく、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ

わがやまとのくにをまもり
あらよすけく、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ

わがやまとのくにをまもり
あらよすけく、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ
わがいのする、なみたせで、をさめたまへ

- 4) 2012年12月7日の後期研究所総会での研究発表、河西秀哉先生の「神戸女学院に天皇がやって来た」における質疑応答の際に伺った。
- 5) 『讃美歌、時局版』について、原恵『讃美歌、その歴史と背景』（日本基督教団出版局、1980）には「1942年にその編集を終えたが、これは結局実際には発行されなかった」（283頁）とあるが、神戸女学院大学図書館には卒業生からの寄贈本として1冊が所蔵されている。学校生使用に限定で出版されたものであろうか？「時局のため、用紙配給の制まり、『讃美歌』を原形のままにて印刷すること到底不可能との説明が序文にある。
- 6) 本論では出版年順に譜例番号を振っているため、言及の順番と譜例番号とは必ずしも一致しない。歌詞カード（歌詞AからD）についても同様である。

【歌詞カード】

歌詞 A) Our native Land (1872)
(John S. Dwight, 1844)

- 1) God bless our native land!
Firm may she ever stand,
Through storm and night;
When the wild tempests rave,
Ruler of winds and wave!
Do thou our country save,
By thy great might.
- 2) For her our prayer shall rise
To God, above the skies;
On him we wait;
Thou, who art ever nigh,
Guardian with watchful eye!
To thee aloud we cry, —
God save the State!

歌詞 B) 『基督教聖歌集』(1884) 244番
「ひのもとなる」(永井えい子)

- 1) ひのもとなる このみくにを
かへりみ なみかぜなく
いとやすらに まもりたまへ
わがかみ
- 2) このみくにを よよにたかく
たたせて きよきすがた
よものうみに うつしたまへ
わがかみ
- 3) あめつちをも しろしめせる
わがかみ みちからもて
なほみくにを まもりたまへ
よよまで

歌詞 C) 『新撰讃美歌』(1888) 256番
「わがやまとの(原)」(松山高吉)

- 1) わがやまとの くのをめぐみ
けがしき なみたたせで
とこしなへに きよめたまへ
わがかみ
- 2) わがあいする くのをまもり
あらぶる かぜをしづめ
世々やすけく をさめたまへ
わがかみ
- 3) わがひのもと ひかりをそへ
みくにの すがたとなし
世々みこころ ならせたまへ
わがかみ

歌詞 D) 『讃美歌』(1943) 412番
「わがやまとの(改)」(松山高吉)

- 1) わがやまとの くのをまもり
あらぶる かぜをしづめ
よよやすけく をさめたまへ
わがかみ
- 2) わがあいする くのをめぐみ
けがしき なみたたせで
とこしなへに きよめたまへ
わがかみ
- 3) わがひのもと ひかりをそへ
みこころ おこなはれて
主のみくにと ならせたまへ
わがかみ

志社女学校にたずねられた時にも、第2次大戦後、天皇陛下が神戸女学院においでになった時にも、生徒一同によってうたわれ、両陛下を感激せしめたという逸話が伝えられている」(230頁)。一方、『同(後編、曲の部)』(1955)によれば、讃美歌415番「Hinomoto」は「オールチンが多分米国の曲から1889年に編曲したものであり、松山高吉の『わがやまとの』の曲として明治版の『讃美歌』および昭和6年版の『讃美歌』に収録された。半世紀以上にもわたって愛

国の讃美歌としてひろく日本人に愛唱されてきた曲である。しかし、祖国愛に満ちて神に祈る歌としては力強さが足りない憾みがある」(256頁)と評されている。原恵はその著『讃美歌、その歴史と背景』(日本基督教団出版局、1980)において、この讃美歌について「G. M. ギャレット George M. Garret (1834-97) の原曲を在日中の宣教師オルチンが編曲した曲に合わせて作詞したという、まごころのあふれたキリスト教的愛国心をうたった歌である」(267頁)と述べている。

次節で詳細を見るように、松山高吉(1846-1935)による歌詞「わがやまとの」の初出は『新撰讃美歌』明治21(1888)年3月【譜例2】、ジョージ・オルチン George Allchin (1851-1935) 編曲の旋律「Hinomoto」の初出は『新撰讃美歌』明治23(1890)年11月である【譜例3】。

ところで、『新撰讃美歌』256番「わがやまとの」の歌詞は、上記412番「わがやまとの」の歌詞と部分的に異なっている(「歌詞カード」の歌詞CとDを参照)。すなわち、後者(歌詞D)は前者(歌詞C)の第1節と第2節を(冒頭の四分の三行を別として)入れ替えた上で、第3節の2、3行目を改めたものとなっている(下線部分が変更箇所)⁷⁾。今回の調査によれば、この改変は明治35(1902)年に行なわれた(次節参照)。本論では、必要な場合には、改変前の歌詞

を「わがやまとの(原)」、改変後の歌詞を「わがやまとの(改)」と表記して区別する。

神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会による『新撰讃美歌資料集』(1993)は、この歌詞の原詩として E. T. Hatfield: *The Church Hymn Book* (New York, 1872) から第1299番「Our native Land」を挙げている(「歌詞カード」の歌詞A)。この英詩の邦訳について、『新撰讃美歌資料

譜例2)『新撰讃美歌』(1888) 256番

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

譜例3)『新撰讃美歌』(1890) 256番

256. HINOMOTO. 664664.

God bless our native land.

わがやまとの く にをめぐみ ひがしき なみた

たせで どしなへに きよめたまへ わがらみ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

三
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

二
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

一
わがやまとの
世々みこころ
あらせたまへ

7) この改変については、石丸新『讃美歌にあった「君が代」』(新教出版社、2007) 102~103頁に指摘がある。

集』は「松山高吉によって新しく訳されたもの」と考える。すでに31-244に訳されていたが、それを継承していない(421頁)とする。「311-244」の訳とは、『譜附基督教聖歌集』(1884)に収められた永井(松本)えい子訳の244番「ひのものとなる」を指す(歌詞B)【譜例1】。

確かに歌詞Bと歌詞C(ないしD)は各々歌詞Aの大意を別の言葉遣いで表していると言えるが、各行の音節数の組合せ(6646664)や3節構成といった詩形の点では歌詞Bと歌詞C(ないしD)とは同一であり、その点での影響関係は無視することができないと思われる。

ところで、讃美歌はマルティン・ルター Martin Luther (1483~1546)の時代から、信者の共有財産として様々な改変や編曲が行われてきた。その特性の一つは、歌詞と旋律がそれぞれ独自の価値を持つことで、時には替え歌として同じ旋律に異なる歌詞がつけられ、時には同じ歌詞に異なる旋律が与えられてきた。それが可能になるのは、各行の音節数の組合せにパターン(metrical pattern)があり、そのパターンが同一の場合である。

上に掲げた英詩(歌詞A)も3つの邦訳(歌詞B, C, D)も、歌詞の各行の音韻数は「6646664」でいずれも同じである。従ってこれらの歌詞は「6646664」の韻律パターンに合う旋律であれば、どの旋律でも問題なく歌うことができる。すなわち譜例1の「America」⁸⁾でも譜例3の「Hinomoto」でも歌うことができる。讃美歌はこのような互換性をもった歌である。このことを念頭に置いて、讃美歌「わがやまとの」の成立と変遷を再考してみたい。

4) 讃美歌「わがやまとの」の成立

今回の讃美歌集の調査では、柳澤健太郎編「国立国会図書館所蔵讃美歌目録(和書編)」『参考書誌研究』第71号(2009年11月)に掲載された303点の内、1947年以前に出版された106点と、手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成』(大空社、1996~1997)全42巻を対象とし、それに神戸女学院大学図書館所蔵分を加えた。

これらの讃美歌集に収録された「わがやまとの」とその関連讃美歌を一覧表にまとめたものを、「表1: 讃美歌『わがやまとの』とその関連讃美歌一覧」として、次頁以下に掲げる。

8) 現在では英国国歌として知られる旋律であるが、1830年代以降アメリカで広く歌われ、1931年に「星条旗」が制定されるまでは事実上のアメリカ合衆国国歌として歌われていた経緯があるため、当時の日本では「アメリカ」の名称で親しまれていた。

譜例1)『譜附 基督教聖歌集』(1884、R1895) 244番

NATIONAL OCCASIONS.

NATIONAL AIR. 6. 6. 4.

JOHN BULL.

三	二	一
あ わ が ほ み く に を	あ め つ ち を も わ が か み よ も の う み よ た く せ て に を	い ど や な ら に わ が か み こ の み く に を

○第二百四十四

God bless our native land.

NATIONAL AIR. 6. 4.

爲自國祝福

二百三十二

ま も り た ま へ	み し ろ し め せ る	う き よ し き た ま へ	よ く よ し た か く	ま も り た ま へ	あ み か せ あ く	こ の み く よ を
----------------------------	---------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

略号：S = 明治期讃美歌・聖歌集成、T = 手代木目錄⁹⁾番号、K = 国立国会図書館番号
 メ = メソジスト、聖 = 聖公会、バ = バプテスト、カ = カトリック、組 = 組合、共 = 共通、個 = 個人
 God. = God save our native land!

No.	讃美歌集、曲番、タイトル、歌詞	詞	曲	備考
1	『讃美歌并楽譜』W. W. カーチス (大阪、1882) 第23 [16頁] 1) かみよきたり みなをうたふを、たすけよ さかえのちち、きたりわれを かへりみよや、みちちよ 2) ひととなりし みこよきたり、いのれる こえのぞみ、たみをめぐめ われのうへに、くだれよ 3) なぐさめある きよきみたま、きたりて よろこばしき、あかしをなし われをさらに、みちびけ 追加、第6、愛国 [120頁] 1) わがうまれし くにのために、みかみよ 鳴ねがはくば、いのりをきき 汝がめぐみを、たれたまへ 2) くにのさかひの あだをまもり、やすんぜよ みやこはとみ、ひなはみのり みなよろこび、あらせよ 3) ちえとまこと せいなるあい、みかども みなとともに、ちからあはせ じゆうをうたひ、ひびかせ 4) 主の日をみな まるるやうに、をしへと 徳と義とを、くにあまねく すみ家ごとに、いははせ 5) 萬こくの主よ なんちにくにを、まかせり アアよりたのむ、かぎりなきのよきととぞ、なりたまへ	かみよきたり (左記参照) [6646664] [Come, thou almighty King! CHB ¹⁰ -158] わがうまれし (左記参照) [6646664] [Lord! While for all mankind we pray. CHB-1, 304]	America [F, 4 声] 第16ページノ 譜 = America [F, 4 声] [My Country, 'ts of Thee]	S21 組
2	『SAMBIKA SONGS OF PRAISE』W. W. カーチス (Osaka, 1882) No. 6 (Aikoku) (Lord! While for all mankind we pray)	わがうまれし 1-3節 [ローマ字]	America [譜なし]	S21 組
3	『基督教聖歌集：譜附』J. C. デビソン (横浜、1884) 第244、為自国祝福、National Air, John Bull, God. 1) ひのもととなる このみにを、かへりみ なみかぜなく、いとやすらに まもりたまへ、わがかみ 2) このみにを よよにたかく、たたせて きよきすがた、よものうみに うつしたまへ、わがかみ 3) あめつちをも しろしめせる、わがかみ みちからもて、なほみくにを まもりたまへ、よよまで	ひのもととなる (左記参照) [6646664] [God save our native land]	America [F, 4 声] [譜例 1]	S15 メ
4	『改正讃美歌』今村謙吉 (大阪、1885) 追加第6、愛国	わがうまれし	[America] [譜なし]	T1088 K15、組
5	『KIRISUTOKYO SEIKASHU』J. C. デビソン (横浜、1887) 第244：National Air, God.	ひのもととなる [ローマ字]	National Air [譜なし]	S15 メ
6	『新撰讃美歌』植村正久、奥野昌綱、松山高吉、G. オルチン (東京、1888、3月) 第256：Hinamoto 1) わがやまとの くにをめぐみ、けがしき なみたたせで、とこしなへに きよめたまへ、わがかみ 2) わがあいする くにをまもり、あらぶる かぜをしづめ、世々やすけく をさめたまへ、わがかみ 3) わがひのもと ひかりをそへ、みくにの すがたとなし、世々みこころ ならせたまへ、わがかみ	わがやまとの (左記参照) [6646664]	Hinamoto, E [譜なし] [= America] [譜例 2]	T1491 K172 共
7	『新撰讃美歌』植村正久、奥野昌綱、松山高吉、G. オルチン (東京、1888、8月再刊) 第256	わがやまとの	Hinamoto, E [譜なし] [= America]	T1491 K173 共
8	『讃美歌』山下猶之助 (東京、1889) 第48	わがやまとの 1, 3節	Hinamoto [譜なし] [= America]	T1356 K118, S31

9) 手代木俊一『賛美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社、1999）418～489頁掲載「日本の讃美歌・聖歌目録」（プロテスタント教会系）による。

10) E. T. Hotfield: *The Church Hymn Book* (New York, 1872)

No.	讃美歌集、曲番、タイトル、歌詞	詞	曲	備考
9	『基督教聖歌集』（名古屋：福音堂十字屋、1890） 第244：為自国祝福、God.	ひのもとなる 1, 2節	National Air [譜なし]	T1118 K45、メ
10	『基督教聖歌集』鶴飼清吉（名古屋、1890） 第244：為自国祝福	ひのもとなる 1, 2節	[譜なし]	T1118 K46、メ
11	『日曜学校うたあつめ』辻井良吉（東京、1890、11月）第17（256*） God bless our native land [* = 新撰讃美歌から採られた意]	わがやまとの	[Hinomoto] [譜なし] [= America]	T1273 K208 S41
12	『新撰讃美歌』[譜付改訂版] 植村正久、奥野昌綱、松山高吉、G. オルチン（東京、1890、11月） 第256、God bless our native land., 雑、国の祝	わがやまとの	Hinomoto [= Allchin, E, 4 声] 【譜例 3】	T1492 K174 S22、共
13	『Hymns and Songs of Praise』植村正久、奥野昌綱、松山高吉（東京、1890、12月）No. 256、God.	わがやまとの [ローマ字]	Hinomoto [Allchin] [譜なし]	S23 共
14	『聖歌集』棚橋孫八（名古屋、1890） 第244：為自国祝福、God.	ひのもとなる	National Air [譜なし]	T1434 K183
15	『童蒙手引聖語集』住田吉太郎（山口県、1891） 第15（聖歌集第244）	ひのもとなる	National Air [譜なし]	K203 S39
16	『基督教聖歌集』J. C. デビソン（東京、1891） 第244：為自国祝福、National Air、God.	ひのもとなる	National Air [譜なし]	T1119 K47、メ
17	『譜附 基督教聖歌集』J. C. デビソン（東京、1891） 第244：為自国祝福、National Air、John Bull、God.	ひのもとなる	America [F, 4 声]	K48 メ
18	『新撰讃美歌』[Tonic-Solfa 譜附] 植村正久、奥野昌綱、松山高吉、G. オルチン（東京、1891） 第256：Hinomoto. God. 基音 E. (Key)、雑、国の祝	わがやまとの	Hinomoto, 基音 E [Allchin, E, 4 声]	T1495 K175, S24 共通
19	『基督教聖歌集』J. C. デビソン（東京、1895） 第416：国福を祈る、God.	ひのもとなる	America [譜なし]	T1120 K49、メ
20	『譜附 基督教聖歌集』J. C. デビソン（東京、1895） 第416：国福を祈る、God.	ひのもとなる	America [譜なし]	T1121 K50、メ
21	『基督教聖歌集：譜附』J. C. デビソン（東京、1895） 第416：National Occasions, Henry Carey、国歌、国福を祈る、God bless our native land	ひのもとなる	America [F, 4 声]	T1120 K51、 S16、メ
22	『軍人讃美歌』今村謙吉（大阪、1895） 第90番：雑の部、国の祝、6646664（新256）	わがやまとの	Hinomoto [譜なし]	T1056 K74、 S31
23	『基督教讃美歌』ベネット（横浜、1896） 第336、National Hymns, H. Carey, God. 国の祝、国の為に祈ること 1) わがあいする くのために、あらぶる かぜをしづめ、みでのうちに まもりたまへ、わがかみ 2) わがいのりを ちちのまへに、とどかせ とこしなへに、ちかくまして まもりたまへ、わがかみ	わがあいする (左記参照) [6646664]	America [F, 4 声] 【譜例 4】	S14 バ
24	『わらべうた、第一集』石橋為之助（大阪、1897） 第2、日の本、新撰讃美歌 第256、God.	わがやまとの	日の本 [Allchin, E, 4 声]	S39
25	『ゆきびら 少年讃美歌集』C. ブラオン（東京、1901） 第16：讃美の歌、Hymn of praise、大和田建樹 1) いざ人々 いざみたちて 謝せよや けはしき山 ひらたき土地 つくりし主のめぐみを 2) 清き流れ 廣き野辺の くさはら 千草の花 よきくだもの みな我主の たまもの 3) いざ人々 皆こぞりて ほめよや 火の中より 荒波より すくひたまふ 我主を 4) 主の光と 主の力と 讃美せよ 月日ゆけど かほりなきは わが喜び 主の徳	いざ人々 (左記参照) [6646664]	Adapted by G. Allchin [E, 4 声]	T1573 K284 S41
26	『救世軍軍歌』ホッダー（東京、1901、R1904, 1906, 1908, 1909） 第92：Gods	ひのもとなる	[譜なし]	S38

No.	讃美歌集、曲番、タイトル、歌詞	詞	曲	備考
27	『古今聖歌集、譜附』 フォス、松山高吉（東京、1902） 第182、Hinomoto、God., 国歌、国家の保護 1) わが大和の くをまもり、暴ぶる 風を志づめ、よよやすけく をさめたまへ、わがかみ 2) わが愛する くをめぐみ、けがしき 浪たせで、とこしなへに きよめたまへ、わがかみ 3) わが日の本 ひかりをそへ、みこころ おこなはれて、主のみくにと 成らせたまへ、わがかみ	改わがやまと (左記参照) [6646664]	Hinomoto [Allchin, E, 4 声] 【譜例 5】	T1155 K88 S36 聖
28	『Ko-Kin Seikasyu』 ロイド、Nippon Seikoukai (1902) 第182、God., Hinomoto	改わがやまと [ローマ字]	Hinomoto, [譜なし]	T1156、 聖 K87, S37
29	『讃美歌』 讃美歌委員（東京、1903） 第373、*（古今182）Hinomoto、God., 雑、国歌	改わがやまと	Hinomoto, [譜なし]	T1360 K120、 共
30	『青年会讃美歌』 G. M. フィジャー、日本基督教青年会同盟会本部（東京、1907） 第57：国歌、*（讃美歌373、古今182）God.	改わがやまと	America, One sharp [譜なし] 【譜例 6】	S31
31	『Sambika, The Hymnal』 Romaji edition（東京、1908） No. 373、Hinomoto、Kokin 182、God.	改わがやまと [ローマ字]	[インチビット、 Allchin] 【譜例 7】	T1361 K121 S26、共
32	『天主教会聖歌』 ベ・マルモニエ（大阪、1910） No. 50、Kokka no tame : ひのもとなる わがくにをば あわれみ きみのめぐみ たみをまもり みちびきたまへ わがかみ	ひのもとなる (異校) (左記参照) [6646664]	America [G、単旋律]	H1910 K197 S 9 カ
33	『讃美歌、七版』 マクネア、別所梅之助（東京、1912） 第373、National、雑、国歌（古今182）、God.	改わがやまと	Hinomoto, Arr. Allchin, 1889, Key E [4 声]	S25共
34	『救世軍歌集』 山室軍平（東京、1914） 第218（讃373、古今182）、God., 日本帝国	改わがやまと	[譜なし]	T1225 K36
35	『讃美歌第一編、十版』（東京、1915） 第373：National、雑、国歌（古今182）、God	改わがやまと	Key E, Hinomoto, Arr. Allchin [4 声]	T1360 K131、 共
36	『こどもせいし集』 H. J. フォス（神戸、1917） 第75、Hinomoto、God., 国歌	改わがやまと	Waga Yamato no, God, [Allchin, Es, 4 声、 + TonicSolf]	T1146 K105
37	『改訂古今聖歌集』 古今聖歌集改訂委員（東京、1922） 第390（讃373、こども75）God., 国歌、国家の保護	改わがやまと	Hinomoto [譜なし]	T1158 K89、聖
38	『改訂古今聖歌集譜附』 古今聖歌集改訂委員（1922） 第390（讃373、こども75）God., 国歌、国家の保護	改わがやまと	Hinomoto [Allchin, Es, 4 声]	T1157 K90、聖
39	『讃美歌』 讃美歌委員会（東京、1931） 第412、信徒の生涯、祖国	改わがやまと	[譜なし]	T1367 K122、 共
40	『讃美歌、第8版』 讃美歌委員会（東京、1933） 第412、Takayoshi Matsuyama、信徒の生涯、祖国	改わがやまと	Hinomoto. Arr. Allchin [E、4 声]	T1367 K123、 共
41	『讃美歌、第10版』 讃美歌委員会（東京、1933） 第412、Takayoshi Matsuyama、信徒の生涯、祖国	改わがやまと	Hinomoto, Arr. Allchin [E、4 声]	T1367 K124、 共

一方、1888年3月に『新撰讃美歌』256番として松山高吉による新訳の歌詞「わがやまとの」【譜例2】が出るが、そこに付された曲の表示は「Hinomoto」である。しかるに、この時点ではオルチン編曲の新「Hinomoto」の旋律【譜例3】はまだ世に出ていない。出るのは2年後の11月のことである。つまり1888年春から1890年11月までの約2年半の間、「わがやまとの」の歌詞は旧「Hinomoto」すなわち「America」の旋律で歌われていたことになる。実際、植村正久（1858～1925）は「わがやまとの」について、「此讃美歌は、松山高吉氏の作歌で、かなり古い歌であるが、余の青年時代には、これを『ワガヤマートノクニヲマーモリアラブルーカゼヲシーイズメヨヤスーケクマモリタアマヘワアガカミ』と米国国歌マイ・カントリの譜で歌ったものである。此の譜がアメリカの国歌の譜と知らずに歌ったものであるが、外国の国歌の譜で、祖国日本の平安を祈ったなどは変なものであった」¹⁴⁾と語っている。おそらく、オルチン編曲の新「Hinomoto」が出版された後も、それが一般に定着するまでの間、旧「Hinomoto」で歌われていたのではないだろうか。

実際、旧「Hinomoto」すなわち「America」の旋律は、1882年のカーチス編『讃美歌并楽譜』（大阪、1882）から1910年のベ・マルモニエ編『天主公教会聖歌』（大阪、1910）に至るまで掲載されており、組合系、メソジスト系、バプテスト系【譜例4】や共通讃美歌【譜例6】、さらにはカトリックの聖歌集にまで広く浸透していたことが明らかである（表3参照）。デビソン編の聖歌集では、この旋律は時に「America」、時に「National Air」と表記されている。

表3）旋律、旧「Hinomoto」＝「America」掲載（ないし指示）の讃美歌集

- No. 1『讃美歌并楽譜』カーチス（大阪、1882）【組合】23番、America
- No. 2『SAMBIKA SONGS OF PRAISE』カーチス（Osaka、1882）【組合】6番、America
- No. 3『譜附 基督教聖歌集』デビソン（横浜、1884）【メ】244番、America
- No. 5『KIRISUTOKYO SEIKASHU』デビソン（横浜、1887）【メ】244番、National Air
- No. 8『讃美歌』山下猶之助（東京、1889）48番、Hinomoto【譜なし】
- No. 9『基督教聖歌集』（名古屋：福音堂十字屋、1890）【メ】244番、National Air
- No. 14『聖歌集』棚橋孫八（名古屋、1890）244番、National Air
- No. 15『童蒙手引聖語集』住田吉太郎（山口県、1891）15（聖歌集244）番、National Air
- No. 16『基督教聖歌集』デビソン（東京、1891）【メ】244番、National Air
- No. 17『譜附 基督教聖歌集』デビソン（東京、1891）【メ】244番、America
- No. 19『基督教聖歌集』デビソン（東京、1895）【メ】416番、America
- Nos. 20&21『譜附 基督教聖歌集』デビソン（東京、1895）【メ】416番、America
- No. 23『基督教讃美歌』ベネット（横浜、1896）【バプ】336番、America [F、4声体]【譜例4】
- No. 30『青年会讃美歌』フィジャー（東京、1907）57番、America【譜例6】
- No. 32『天主公教会聖歌』ベ・マルモニエ（大阪、1910）【カト】No. 50、America [G、単旋律]

5）讃美歌「わがやまとの」収録の讃美歌集

では、オルチン編曲の新「Hinomoto」の旋律は、1890年に初めて公刊された後、どのように浸透していったのだろうか。新「Hinomoto」の旋律を掲載した讃美歌集をまとめてみると（表4参照）、まず『新撰讃美歌』（1890年と1891年の2種）で公刊された後、子ども讃美歌集

14) 佐波亘編『植村正久と其の時代』第4巻（教文館、1938）、443頁。

表4) 旋律、新「Hinomoto」(オルチン編曲、1890年初出) 掲載の讃美歌集

No. 12『新撰讃美歌』[譜付改訂版](東京、1890)【共】256番、Hinomoto [E, 4 声]【譜例3】
No. 18『新撰讃美歌』[Tonic-Solfa 譜附](東京、1891)【共】256番、Hinomoto [E, 4 声]
No. 24『わらべうた、第一集』石橋為之助(大阪、1897)2番、日の本 [E, 4 声]
No. 25『ゆきびら 少年讃美歌集』ブラオン(東京、1901)16番 [E, 4 声]
No. 27『古今聖歌集、譜附』フォス、松山高吉(東京、1902)【聖】182番 [E, 4 声]【譜例5】
No. 31『Sambika』(東京、1908)【共】No. 373、Hinomoto [インチピット、Allchin 型]【譜例7】
No. 33『讃美歌、七版』マクネア、別所梅之助(東京、1912)【共】373番、Hinomoto [E, 4 声]
No. 35『讃美歌第一編、十版』(東京、1915)373番、Hinomoto [E, 4 声]
No. 36『こどもせいか集』フォス(神戸、1917)75番、Waga Yamato no [Es, 4 声]
Nos. 37&38『改訂古今聖歌集譜附』(1922)【聖】390番、Hinomoto [Es, 4 声]
No. 40『讃美歌、第8版』讃美歌委員会(東京、1933)【共】412番、Hinomoto [E, 4 声]
No. 41『讃美歌、第10版』讃美歌委員会(東京、1933)【共】412番、Hinomoto [E, 4 声]
No. 44『讃美歌、時局版』(東京、1943)412番 [E, 4 声]
No. 45『改訂古今聖歌集 譜附』(市川、1948)【聖】390番、Hinomoto [Es, 4 声]
No. 46『讃美歌、改訂版』由木康(東京、1949)415番、Hinomoto [E, 4 声]

(1897年の『わらべうた』と1901年の『ゆきびら』¹⁵⁾)に掲載されて若年層から浸透していったことが窺われる。松山高吉が平安女学院への奉職を機として明治29(1896)年に組合教会から聖公会へと転会した後¹⁶⁾、聖公会の讃美歌集編纂にも携わり、1902年の『古今聖歌集、譜附』【譜例5】を始めとして、聖公会系の聖歌集にも新「Hinomoto」の旋律が継続して収録されるようになった。この1902年の『古今聖歌集、譜附』は、1901年発足の讃美歌委員会が定めた「共通讃美歌」125編をすべて含む重要なものだが、この讃美歌集への収録に際して歌詞が「わがやまとの(改)」へ改められ、それが翌1903年の『讃美歌』以降で引き継がれて定着していった。

表1と表4とを対照すると明らかなように、1910年以降の讃美歌集ではもっぱら新「Hinomoto」の旋律と「わがやまとの(改)」の歌詞が用いられており、1890年の初出から20年を経てすっかり定着したことが知られる。この新「Hinomoto」すなわち「わがやまとの(改)」は戦後の讃美歌集でも引き継がれたが、1997年の『讃美歌21』に収録されなかったことは上述の通りである。

以上から、讃美歌412番「わがやまとの」の歌詞(歌詞D)すなわち「わがやまとの(改)」は1902年から用いられ、同じく旋律(新「Hinomoto」)は1890年の初出の後、1910年以降は旧「Hinomoto」すなわち「America」に取って代わる形で広く用いられて、教会関係者に定着していたことが明らかになった。

6) 歌の力

「陛下は、この歌詞をどのように受け止められたであろう。三番まで歌い終わって、畠中院長が次の場へと二度三度先導されようとしても、陛下はじっとお立ちのまま動こうとされない。私たちは一番から讃美歌を繰り返し歌った。ごく自然な成り行きであった。あふれる涙を抑えることができず、泣きながら歌い続けた。陛下の目も潤んでいたようだ。お付きの人も警

15) ただし『ゆきびら』は歌詞が異なる(表1参照)。

16) 溝口靖夫編著『松山高吉』(創元社、1969)、113頁。

備の人も泣いた。この日の終わりごろ、デフォレスト先生が畠中院長に It's been a wonderful day. と静かにおっしゃって、院長先生が Yes, wonderful. とお答えになったのを、耳にしたと語った友もいた。本当に皆がそう思った一日であった」と卒業生の一人が述懐している¹⁷⁾。当時の報道も、「見れば天皇も泣いておられた…侍従もデフォレスト院長も辰馬西宮市長も谷崎警備部長も卒業生もみんな泣いた」と伝えている¹⁸⁾。

一つの歌が、そこに居合わせた人々の心をつなぎ、かつての敵対関係あるいは支配・被支配の関係を越えて、人間的な交流をもたらしたことは確かな歴史的事実として存在したと理解される。

讃美歌412番「わがやまとの」は、皇紀二千六百年祝賀礼拝（1940年10月17日）や日本基督教団の結成時（1941年6月24～26日）でも歌われ、また柳原貞次郎が「この歌はキリスト教の国歌のような感じがする。単純でしかも日本人らしい祈りを神にささげている。全くこれはキリスト教会の『きみがよ』である」と記したように¹⁹⁾、戦前の「祖国愛に満ちた「愛国」の讃美歌として、天皇尊崇の働きを担ってきた歌である。今日から見れば、戦前の価値観を色濃く纏った歌として、糾弾の対象ともなっている。

しかし、敗戦直後、銃を手にした GHQ に護送されてやってきた天皇を目の前にした時、女学院の中庭に集っていた人々にとって、この讃美歌はふと歌い出したと思えるほど自然に口をついて出て来る歌であった。それは1890年の『新撰讃美歌』以来、明治・大正・昭和の讃美歌集に引き継がれて、長年にわたって日々、人々の心と体に沁み込んでいた歌の力であったと言えるだろう。

追記：なお、『神戸女学院百年史（総説）』に「デフォレスト院長の帰院は天皇来院の一日前のこと」（278頁）とあるが、これは「十日前」の誤りと考えられる。『神戸女学院週報』（1947年6月2日～6日）によれば、「デフォレスト名誉院長にはケリー先生夫人と共に5月31日帰任せられる予定」で、6月2日（月）に「名誉院長デフォレスト及びケリー夫人歓迎礼拝」が組まれている。『私たちの学生時代、神戸女学院ものがたり』でも「行幸を前にして6月2日にデフォレスト先生が帰院され」（207-208頁）とあり、卒業生の記憶でも十日前である。百五十年史編纂に当たって訂正が望まれる。

謝辞：本稿は神戸女学院大学研究所2013年度研究助成によって支えられていることを記して感謝する。

名誉教授の岡田晴美先生（M67）からも特に讃美歌の練習はなかったとのお話を伺った。記して感謝する。

（原稿受理日 2014年3月3日）

17) 高木和子（65回）「動乱の中の学生時代」『私たちの学生時代、神戸女学院ものがたり』（「私たちの学生時代」を発行する会、1999）204-210頁。

18) 『朝日新聞』（大阪版、1947年6月13日）

19) 柳原貞次郎「キリスト教の洗礼を受けた国学者松山高吉大人」、溝口靖夫編著『松山高吉』（創元社、1969）11～13頁の12頁。